

サン・テグジュペリと砂漠

加藤 宏 幸

サン・テグジュペリ Saint-Expéry (1900-1944) のほとんどすべての作品にはその背景に砂漠が存在している。『星の王子さま』 *Le Petit Prince* (1943) の24章で砂漠に不時着した飛行士は次のように述べている。「ぼくはいつも砂漠がすきだった。砂丘の上に座る。何も見えない。何も聞こえない。しかしながら、何かが沈黙の中で輝いている……」¹⁾。サン・テグジュペリがどうして砂漠を一生涯愛し続けたのか、彼にとって砂漠はどのような意味を持っていたのかについて、彼の砂漠での実際の体験、彼の作品の背景として存在する砂漠を通して明らかにしたい。

I. 砂漠との接触

サン・テグジュペリは1921年6月に民間パイロット免許を、1922年1月に軍パイロット免許を取得した。予備役後少尉に昇進し、ル・ブルジュ Le Bourget の第33飛行連隊の戦闘機部隊に配属される。兵役終了後バレス Barès 将軍の推薦で空軍に入ることができたが、個人的事情で、1923年6月にブワロン・タイル会社 Tuileries de Boiron に入社し、その後ソーレ自動車会社 Automobiles Saurer に移り、全く興味のない仕事をする。

1926年春、サン・テグジュペリはテストパイロットとしてフランス航空会社 Compagnie Aérienne Française に入社し、その年の秋には、ラテコエール Latécoère 航空会社に移る。1926年から1927年にかけての冬中、トゥール

ズToulouse—ペルピニャンPerpignan間を繰り返し試験飛行する。

1927年春サン・テグジュペリは正式に郵便機のパイロットになった。同僚とスペイン領リオ・デ・オロRio de Oroの砂漠に不時着し、不帰順民の襲撃におびえながら、恐怖のしかし充実した一夜を過ごしたのはこの時期である(『人間の土地』*Terre des hommes*第2章—1参照)。これが、彼の砂漠との直接的な最初の接触である。

1927年10月、彼はリオ・デ・オロの不帰順地区の真ただ中にあるカップ・ジュビーCap Jubyの飛行場長に任命され、そこに約13か月間留まることになる。当時、リオ・デ・オロの不帰順地区に不時着した飛行士が反抗部族に殺されたり、捕らえられたりする事件がしばしば起こっていた。リオ・デ・オロのスペイン総督ラ・ペーニャPeña大佐は、カップ・ジュビーに郵便機が着陸するのを禁じようとしていた。飛行場長としてサン・テグジュペリに任された任務は二つあった。郵便機の着陸の継続を求めるためスペイン総督と交渉すること、砂漠に不時着した飛行士とできれば郵便物と飛行機も救出すること。

スペイン総督との交渉はうまく行き、今までと同じように郵便機が着陸できるようになる。ある時は、砂漠に不時着した飛行機のエンジンの取り替え作業を反抗民の銃弾にさられながら行い、その飛行機を再び飛び立たせ、またある時は、不帰順地区に不時着しモール人の捕虜になったレーヌReineとセールSerreを、117日間に及ぶ交渉の末連れ戻す。またある時は、砂漠に不時着し反抗部族に包囲され攻撃されようとしていたスペインの中尉を救出する。

1928年10月、サン・テグジュペリはカップ・ジュビー飛行場長としての任務を終えた。砂漠に滞在した約13か月間は、彼の生涯にとってきわめて重要である。住居の前に広がる海と星と砂に取り囲まれて、彼は特に自分自身のこと、自分の将来について真剣に考えた。彼はパイロットという職業を一生の職業にする決心をし、小説を書く決心もした。そしてこの地で彼の最初の小説『南方郵便機』*Courrier Sud*(1929)を書き上げた。砂漠での貴重な体験は彼の心の中に生き続け、彼の作品の中に反映されることになる。この時期

以後、砂漠は彼の心の故郷となった。

（『南方郵便機』）第1部ーベルニスBernisの操縦するフランスー南米線の郵便機は、午後5時40分にトゥルーズを発つ。ただちにカップ・ジュビーの情景描写。

「水のように澄みきった空が星を浸し、星を現像していた。ついで夜になった。重なり合った砂丘を見せて、サハラ砂漠は月光を浴びて広がっていた。われわれの額の上には、物を届けるのではなく、物を組み立て、それぞれの物を優しい物質で養うランプの光が差していた。かき消されたわれわれの足音の下には、豪華な厚い砂があった。そしてわれわれは日光の重さから解放され、帽子をかぶらずに歩いていた」²⁾

ベルニスの郵便機の出発・到着時刻とその飛行経過は、無電でスペインとアフリカの飛行場に次々と連絡される。

第2部ーベレニスは、2年間のアフリカ勤務を終えパリに帰る。幼友達のジュヌヴィエーブGenevièveに再会した時、泉を見出だしたように思う。子供の死後彼女の心は夫から離れ、彼女はベルニスを恋慕うようになる。二人は駆け落ちまでするが、結局別れの時が来る。ベレニスはトゥルーズから南米へ向かって出発した。

第3部ーベレニスはカップ・ジュビーを飛び立つ。ポール・エティエンヌPaul-Étienneに立ち寄り、サン・ルイSaint-Louisに向けて飛び立つが、竜巻を伴った熱風に巻き込まれ砂漠に不時着する。サハラ砂漠にあるフランスの小さな砦で星の見張りをしている軍曹と一夜を語り明かす（『人間の土地』第6章ー2参照）。翌朝再びサン・ルイに向かって出発するが、消息を絶つ。カップ・ジュビーの友が捜索に向かい、反抗部族に襲われ射殺されたベルニスの死体を発見する。

「この砂丘の上に、十字架の形に両腕を組み合わせて、顔を濃紺の入江と星の村々に向けて横たわっていた君は、すでにわずかな重さになっていた。

多くの絆を断ち切って南へ向かって下っているとき、もはやぼくという友達だけになってしまって、ベルニスはどんなに身軽だと感じていたこと

か。蜘蛛の糸が君をわずかにつなぎ留めてはいたのだが……。

昨夜、君はさらに身軽になってしまった。君は目まいに襲われた。真上の星に宝を見つけて、彼は飛び去ったのだ！

ぼくの友情の蜘蛛の糸がなんとか君をつなぎ留めていたのだが、不実な羊飼いのぼくは居眠りしていたにちがいない」³⁾

航空郵便物は、ベルニスの友人の飛行機によってダカールに運ばれる。

『南方郵便機』の冒頭には、澄みきった空の下に広がる、月光を浴びた砂漠の光景が描かれ、ついで南米へ向かって、砂漠の上を飛ぶベルニスの気持ちが描かれる。第2部にはパリにおけるベルニスとジュヌヴィエーヴの出会いと別れが語られているが、第3部ではまた砂漠に戻り、カップ・ジュビーでの友との語らい、砂漠の砦での軍曹との語らい、そして最後に死んで魂となって真上の星に向かって飛び去るベルニスが描かれる。

ベルニスは生の喜びをパリでは見つけることができなかった。砂漠の上を飛んでいる時、砂漠で友や軍曹と語り合う時、彼は幸せであった。そして砂漠で死に魂となって星へ向かった。

この作品の背景には常に砂漠が存在する。冒頭から砂漠の光景であり、ベルニスの死の舞台も砂漠である。パリに戻ったベルニスの心の中にはいつも砂漠が存在していたと考えれば、『南方郵便機』の背景には、最初から終わりまで砂漠が存在していたと考えることができる。この作品を読むことによって、われわれはサン・テグジュペリがどんなに砂漠を愛していたか、カップ・ジュビーでの13カ月がいかに素晴らしかったを知ることができる。

1929年10月、サン・テグジュペリは、航空郵便会社の南米開発主任としてブエノス・アイレスBuenos Airesに派遣され、航空路の開拓に従事する。

1930年、彼は『夜行飛行』*Vol de nuit* (1931)を書く。この作品に砂漠は描かれていないが、星がしばしば描かれる。

(『夜間飛行』)作品の最後の場面は感動的である。ファビアンFabienの乗っ

た郵便機は暴風雨に巻き込まれ、海上に流されてしまい、もう助かる見込みはない。暴風雨の切れ目に三つの星を見つけて上昇して行く。

「『とても素晴らしい』とファビアンは思った。彼は、宝物のようにどっさりと蓄積された星の間、彼と無線技師の同僚以外には絶対に何も生きていない世界をさ迷っていた。おとぎ話の町の盗賊どものように、もはや出る事のない宝の部屋に閉じ込められて、冷たい宝石の間を、限りなく富んで、しかし死刑を宣告されて、彼らはさ迷っていた」⁴⁾

このような星の描写には、サン・テグジュペリが砂漠で見た星の体験が反映されている。砂漠では、澄んだ空気を通して星がすぐ近くに見える。砂漠と星とは砂漠では一体である。

1931年、サン・テグジュペリはブエノス・アイレスで知り合ったコンスエロ・スンシン Consuelo Suncin と結婚する。1932年、ラテコエール社にテストパイロットとして入社する。1935年、パリーサイゴン Saigon 間 87 時間の飛行記録に挑戦する決意を固める。1935年12月29日、機関士プレヴォ Prévot と一緒に飛び立つ。カイロの手前 200 キロメートルのリビア砂漠に墜落。5 日間ほとんど何も食べも飲みもせずに砂漠を歩き続け、アラブの隊商に救助される。これは、サン・テグジュペリの 3 回目の砂漠との直接的接触である（『人間の土地』第 7 章 1 - 7 参照）。

1938年2月15日、フェゴ諸島に向かってニューヨークを飛び立ち、順調に飛行してガテマラに着く。そこで離陸の際に事故を起こし、重傷を負う。3月にニューヨークに戻り、回復期に『人間の土地』（1939）を書き上げる。アメリカでは『風と砂と星』 *Wind, Sand and Stars* で出版され、ベストセラーとなる。

（『人間の土地』）この作品は小説ではない。それは、個人の体験、同僚のパイロットの感動的な活動、そして飛行機、地球、人間などについての考察がまとめられたものである。しかしながら、一見ばらばらに見える8章は人間の

本質の探究というテーマで緊密に結びついている。

第2章「僚友」*Les Camarades*—砂漠に不時着したメルモーズMermozのことが語られている。彼は不帰順民のモール人に捕らえられ、虐殺におびえながら15日間捕虜の身に留まり、やっと解放される（1927年）。

リゲルRiguelleは故障のためリオ・デ・オロの不帰順地区に不時着する。サン・テグジュペリが救出に向かい着陸した時には、日が暮れかけている。故障を修理するために夜明けを待つ。モール人の襲撃におびえながら、互いに思い出を語り合い、冗談を言い合い、歌を歌って一夜を過ごす。風と星と砂だけしかない世界で、彼らはお祭りの中にいるような感激を味わう。

第4章「飛行機と地球」*L'Avion et la planète*—サン・テグジュペリは、モール人に捕らえられていた僚友レーヌとセールを救出するために砂丘に着陸した時のことを想起する。再びそこから飛び立つに先立って、いまだかつて一度も人間にも獣にも汚されたことがないその土地を去りがたく、星の輝く下で隕石を拾い集めてしばらく時を過ごす。

さらに彼は、砂漠に不時着して、モール人の襲撃を恐れながらたった独りで一夜を過ごした時のことを思い出す。その夜突然、少年時代の休みの大部分を過ごしたサン・モーリス・ド・ルマンSaint-Maurice-de-RemensのトリコTricaud伯母さんの屋敷でのことが思い出され、全く寂しさを感じない。

第6章「砂漠にて」*Dans le désert*—サン・テグジュペリは砂漠での体験について語る。——フランスの砦で一夜を軍曹と星について語り明かした。——手なずけたモール人を砂漠の外に連れ出し、樹木や泉や花を見せてやった。しかし、アラールの神への愛が蘇って、キリスト教徒の士官を殺してしまった。——フランス人ボナフBonnafousは、200人のモール人を引きつれて疾走用のらくだに乗って襲いかかってくるため、不帰順民に恐れられている。彼がいるため、砂漠は活気づいている。——カップ・ジュビーにいた時、モール人の奴隷モアメッドMohammedがマラケシュMarrakechに連れて行ってくれと毎晩嘆願に来た。モール人との交渉の末、モアメッドを買い取ること成功し、飛行機で彼を故郷に返した。今日もう不帰順砂漠はない。

サン・テグジュペリは、不帰順砂漠であったために、自分の砂漠での生活が

あれほどまでに豊かであったのだと思う。

第7章「砂漠の真ん中にて」*Au centre du désert*—サン・テグジュペリは、機関士プレヴォと一緒にインドシナへ向けて飛び立つ。突然、時速270キロで地面に激突する。そこは砂漠の真ん中であつた。

彼らは液体を飲み尽くしてしまう。救援隊は来ない。こなごなになった翼の破片で、薪の山を築く。

「今炎は高く昇る。敬虔な気持ちで、ぼくらは砂漠の中に燃え盛る標識灯を眺めている。ぼくらは夜の中に輝く無言のメッセージを眺めている。このメッセージは悲壮な叫びを運んで行くと同時に、またたくさんの愛情も乗せて行くのだとぼくは思う。ぼくらは水を飲みたいと懇願し、さらに伝言したいとも懇願しているのだ。別の火よ夜の中にとまれ、人間だけが火を利用できるので、人間よ答えてくれ！

ぼくには妻の目が見えてくる。この目以外は何も見えない。その目は、質問する。ぼくに関係あるような人々の目が見えてくる。それらの目が質問する。一つにまとまった視線の集合がぼくの沈黙を責める。ぼくは答えているよ！ぼくは答えているよ！ぼくは力の限り答えているよ、これ以上輝かしい炎を投げ上げることはできないよ！」⁵⁾

サン・テグジュペリにとっては、今耐えている苦痛は何でもない。耐えがたいのは待っていてくれる人の目であり、その人たちが立てる叫び声である。彼らの方が助けを求めて叫んでいるのだ。彼は心の中で叫ぶ。ぼくらこそ救助隊だ。助けに駆けつけてやる。

二人は壊れた飛行機を見捨て、倒れるまで歩く決心をして出発する。夜になる。小石の上に腹ばいになって、サン・テグジュペリは遺書を書く。寒さをしのぐために、砂の中に寝る。寝ながら彼は考える。死は間近だ。自分は人間のもとへ戻ろうと力の限り努力した。

夜が明ける。風向きが変わったため露が降りない。彼らはまた歩き出す。倒れながら歩き続ける。サン・テグジュペリは、苦痛を感じないし、いかなる感情も沸き起こらない。彼は砂漠と同化してしまっている。砂漠はぼくだ。
(Le désert, c'est moi.)

彼らは砂の上に足跡を見つける。渴きのため、生命はあと2、3時間しかない。人が来るのを待っていることはできない。突然、アラビア人が砂丘の上に現れる。彼らはわめくが声が出ない。アラビア人が彼らの方へ歩いて来る。与えられた水を夢中になって飲む。彼らは救われた。

前にも述べたように、サン・テグジュペリとプレヴォがサイゴンに向けて飛び立ち、リビア砂漠に墜落したのは1935年12月29日である。砂漠の中を5日間さ迷い助かるまでの体験が、ここに忠実に再現された。

サン・テグジュペリは実際には自分が救助を求めているにもかかわらず、砂漠の外で自分を待っていてくれる人たちが助けを求めていると考える。彼の砂漠との闘いは、砂漠の外で自分を待っていてくれる人たちを救出するために行った闘いである。愛する者に対する責任を常に心に感じ続けて、彼はついに愛する者のもとへ戻った。砂漠は彼に、愛する者に対しては責任があることをはっきりと教えてくれた。これが、サン・テグジュペリの主要な思想の一つとなった。

1939年9月、フランスはドイツに宣戦布告する。サン・テグジュペリは2/33偵察飛行大隊に配属される。1940年春からますます危険になってくる数多くの偵察飛行を行い、奇跡的に帰還することもある。1940年5月22日、アラスへの偵察飛行を行う。ドイツ軍の激しい砲火を浴びながらも、偵察飛行を完全に遂行する。この体験が元になって、『戦闘パイロット』*Pilote de guerre* (1942)という作品が生まれる。

1940年6月、休戦条約が調印され、サン・テグジュペリは8月に動員解除になる。12月、リスボンLisbonneからニューヨークに向かって出発する。

1941年、ニューヨークで『戦闘パイロット』を書く。アラス上空でドイツ軍の猛烈な砲火を浴びながらも偵察飛行の任務を完全に遂行したことによって、彼は、飛行大隊の仲間、そしてフランスという共同体としっかりと結ばれていることを感じ取れたし、戦争で死ぬことの意味も把握できた。

ニューヨークに住むフランス人は、ペタンPétain派、ドゴールde Gaulle派、

無党派に分かれて争っていた。サン・テグジュペリは、自分に敵対するたぐさんのフランス人がいるのに驚いた。彼は実際に戦いに参加した者として、休戦条約の締結、その結果成立したヴィシーVichy臨時政府の存在を承認していた。それ故、ペタン派、ヴィシー派と見なされ非難された。

『ある人質への手紙』 *Lettre à un otage* (1943) を書くことによって、サン・テグジュペリは、彼をナチ、ファシスト呼ばわりしたドゴール派を中心とした人たちに対して、身の証を立てようとした。彼は、現実には戦っているのはフランスの外にいる人たちではなく、ドイツ占領下のフランスで苦しんでいる人たちであり、亡命者である彼らに自分を非難する権利がないことを間接的に示した。

(『ある人質への手紙』) アメリカに向かう船にはたぐさんの亡命者が乗っていたが、過去のことしか語らない亡命者は、サン・テグジュペリには亡霊のように見えた。サハラ砂漠で過ごした生活を思い起こす。

一見すべてが孤独と貧窮でしかないサハラ砂漠での生活であったが、その3年間は、彼にとってはもっとも素晴らしい年月であった。亡命者を満載したこの船の上で、彼には砂漠が理解できるように思えた。サハラ砂漠は見渡す限り砂ばかりであるが、しかしながら目に見えない神々が、ひそかな生きた筋肉組織をそこに築いている。一様ではなく、すべてが方向づけられている。

1943年、サン・テグジュペリは、船でアメリカを去り北アフリカへ向かう。出発の数日前に、『星の王子さま』 *Le Petit Prince* (1943) が出版される。

(『星の王子さま』) サハラ砂漠に墜落した飛行士サン・テグジュペリ (物語では《je》〈ぼく〉と表現されている) は、小さな王子に出会う。王子と話しているうちに、彼は王子がどこから来たのか分かる。王子の星には、彼の愛しているバラの花が1本あることも分かる。自分の星にいた時王子は真剣にその花を愛していたが、次第に花を疑うようになって行った。そして花と別れ、六つの星を巡って地球に来たのである。

王子は砂漠に降り立ち、歩いて行く。バラの花がたくさん咲いている庭に出る。王子の星の花は、自分のような花は世界中で自分だけですと言っていたので、たくさんのバラの花を見て、王子は悲しい気持ちになる。友達になったキツネに、「バラの花をまた見に行ってみなさい。君のバラの花がこの世に一つしかないものであることが分かるから」とキツネ言われ、王子はバラの花のところに行く。王子は今、自分のバラの花がこの世に一つしかないものであることを理解する。キツネは別れの贈り物として、次のような言葉を贈る。「心で見なければものはよく見えない。大切なものは目には見えない」。「君は君の飼いならしたものには永久に責任が生じるのだ。君はバラの花に責任があるのだ……」

王子が、「井戸を探しに行こう」と言ったので、サン・テグジュペリもついて行く。夜明けに井戸を発見する。次の日の晩サン・テグジュペリが王子のところに戻って来た時、王子に噛みつこうとしているへびを見つけ驚く。王子は今夜自分の星へ帰ろうとしている。その夜王子は、こっそりと出発する。サン・テグジュペリは首尾よく追いつく。王子の足首のそばに黄色い光がきらりと光ったかと思うと、彼は1本の木が倒れるように静かに倒れた。

王子は毒へびに噛まれて、自殺した。古い皮une vieille écorceである肉体を脱ぎ捨て、魂だけとなって自分の星の自分のバラの花のもとに帰り、心だけをバラの花に与えた。

サン・テグジュペリは自分の家に戻ることができた。王子に描いてやった口籠に皮ひもをつけるのを忘れたので、ヒツジがバラの花を食べてしまったかもしれないと心配する。

この物語においても背景に砂漠がしばしば存在し、重要な役割を果たしている。不時着した飛行士サン・テグジュペリが王子に出会うのは砂漠であり(第2章)、王子が星を巡って最後に訪れるのも砂漠である(第17章)。王子は砂漠を横切り(第18章)、砂漠の高い山に登る(第19章)。キツネと出会うのも砂漠であり(第21章)、二人で井戸を探しに行くのも砂漠であり(第24章)、井戸の水を飲むのも砂漠である(第25章)。そして最後に、王子がへび

に嘯まれて自殺し、魂だけとなって自分の星に向かって飛び立つのも砂漠である。

1943年5月4日サン・テグジュペリはアルジェに上陸し、6月4日、ウーシタOujdaの飛行中隊に復帰し、当時最新銃のP38ライトニング機の操縦許可を獲得する。7月21日フランス上空1万メートルを偵察飛行し、ローヌの谷を写真撮影し帰還する。8月1日、2回目の偵察飛行から帰還した時、着陸に失敗し飛行を禁止される。戦闘への参加を拒否されたため深く傷つき、『城砦』*Citadelle* (1958)の執筆に取りかかったが、専心できなかった。2/33飛行大隊への復帰をひたすら願っていた彼は、ナポリに赴きエーカーEaker 将軍に直接会見し、2/33飛行大隊への復帰と戦闘機操縦の許可を得る。

1944年5月8日、2/33飛行大隊はナポリからサルジニアのアルゲロAlgheroに移動する。サン・テグジュペリは飛行訓練を再開する。7月17日、飛行大隊はコルシカ島のボルゴBorgho基地に移動する。彼は、許可された5回の偵察飛行を超えて8回の飛行を行っている。7月31日8時45分、彼はP38の223号機に乗ってボルゴ基地から飛び立ち、行方不明になる。

ボルゴ基地の兵舎のサン・テグジュペリの部屋には、985ページにも達する膨大な量の『城砦』の原稿が、未完成の状態のまま残されていた。サン・テグジュペリが行方不明になった1944年7月31日から4年後の1948年に、初めて『城砦』が刊行されたが、それは不完全なものであった。それから10年後の1958年になって、草稿のほぼ完全な復元が行われ、プレイアード叢書の『アントワーヌ・ド・サン・テグジュペリの作品』の中に収められて刊行された。『城砦』はその形式にもかかわらず、作者自身との結びつきは深く、この作品を読むことによって、彼が生涯の最後の時期に到達した彼の本質的考えのいくつかを知ることができる。

『城砦』には、一貫した明確な筋はない。父が砂漠に建設した強固な帝国を受け継いで、砂漠の部族の族長となった《私》が、人民の生き方を強圧的な手段を用いて改良することによって、崩壊に瀕している帝国を再建しようと

する物語であるとあえて言うことができるが、全体は一つのまとまった物語の形式をなしてはいない。族長は主として父から受け継いだ考え、また彼自身が深い瞑想から導き出した帝国の再建と人民の建設についての考えを述べている。サン・テグジュペリは族長という人物を通して、人間社会の再建と人間の建設についての自分自身の考えを述べたのである。彼がこの作品において人間社会の再建のために人間に求めたものは数多く列挙できるであろうが、特に次のようなことが注目されるべきである——神へ向かっての苦しい歩み、共同体の一員としての他者への責任、自由に伴う束縛の受容、〈愛する〉ことではなく〈愛さなければならない〉という真の愛の実践等。

『城砦』においても他の作品におけると同様に、物語の背景に砂漠が存在している。サン・テグジュペリは瞑想の場として砂漠を選び、砂漠を基盤として彼の考えを展開させた。

II. 砂漠への愛

サン・テグジュペリが最初に砂漠と接触したのは1927年春で、正式に郵便機のパイロットになった彼が、サハラ砂漠に不時着し、不帰順民の襲撃におびえながら恐怖の一夜を過ごした時である。2回目の接触は、1927年10月から1928年10月まで、リオ・デ・オロの不帰順地区の真ただ中にあるカップ・ジュビーの飛行場長として過ごした13カ月間である。3回目の接触は、アンドレ・ジャビーが保持していたパリーサイゴン間87時間の飛行記録に挑戦し、リビア砂漠に墜落し、5日間砂漠を歩き続け救助された時である。

サン・テグジュペリの砂漠との直接的接触は以上の3回であるが、そのどれもが彼のその後の人生にそして彼の文学に重要な影響を与えることになった。砂と星の間、孤独の中で、彼は自分自身について、自分の将来の生き方について熟考し、生涯の職業としてパイロットを選んだ。そして砂漠で彼はたくさんの貴重な体験をし、人間的に大きく成長した。そして砂漠は、彼にとって決して忘れ得ない心の故郷になって行った。

サン・テグジュペリは『人間の土地』で次のように述べている。

「君にとってサハラ砂漠とは何なのか、軍曹。それは、君に向かって永遠に歩み続ける神un Dieuであった。またそれは、5000キロメートルに亘る砂の背後にいる金髪の従姉妹の優しきであった。

われわれにとって砂漠とは何なのか。それはわれわれの中に生まれたものであった。われわれ自身について教えてくれるものであった。」⁵⁾

砂漠はサン・テグジュペリにとっては、単なる貴重な体験をした場所としていつまでも留まっていた。それは次第に、精神的、象徴的なものになって行った。イヴ・モナンは次のように述べている。

「その作家にとって砂漠が、常につきまとうものではないにしても、永遠の象徴的力 la puissance symboliqueになったことを感じ取るためには、『城砦』と『人間の土地』を読みさえすればよい。シモーヌ・ランブラン Simone Lamblinはサン・テグジュペリの最後の作品（筆者注——『城砦』のこと）に付した彼女の序文の中でそれを指摘している。

『サハラ砂漠における彼の生活の記憶が、彼の思考を高揚させ、砂漠を彼の瞑想の場所の一つとして選ぶように仕向けた』。われわれは間違うことを恐れずに、その作家個人の考え方によれば、砂漠は人間が生き延びるために闘う義務がある敵の中心地の価値を持っていると断言できる」⁶⁾

砂漠は、人間の世界で生きること疲れサン・テグジュペリが、現実においても精神的にも、新しい出発のために立ち戻る場所であった。『星の王子さま』の第24章において、飛行士のサン・テグジュペリと王子は井戸を探し求めて砂漠の中を歩き回り、ついに井戸を見つける。サン・テグジュペリが砂漠に立ち戻るのには、井戸の水を飲み生きる力を得るためである。

サン・テグジュペリの主要な考えが提示されている『人間の土地』において、彼は、人間の偉大さ、職業の偉大さ、僚友愛、そして人間愛について具体的に語った。このような考えが生まれたのも、飛行士となり死ぬまで飛び続けたのも砂漠での生活と体験があったからであり、何よりも最後まで砂漠が好きだったからである。

注

- 1) SAINT-EXUPÉRY (Antoine de), *Le Petit Prince* (*Œuvres d'Antoine de Saint-Exupéry*, 《*Bibliothèque de la Pléiade*》, Paris, Gallimard, [1959], p.479. (《*Bibliothèque de la Pléiade*》は以下 B. P.と略す)
- 2) SAINT-EXUPÉRY, *Courrier Sud* (B. P., p.3).
- 3) *Ibid.*, p.77.
- 4) SAINT-EXPÉRY, *Vol de nuit* (B. P., p.125).
- 5) SAINT-EXPÉRY, *Terre des hommes* (B. P., pp.189-190).
- 6) MONIN (Yves), *L'Ésotérisme du 《Petit Prince》*, Paris, Nizet, 1976, p.21.